
帰国渡日児童生徒つながる会

第1章 プロジェクトの概要など

1. プロジェクトの名称、目的など

・名称「帰国渡日児童生徒つながる会」

・目的

現在、京都府の学校には、国際結婚の家庭に生まれた子どもや、在日外国人、帰国児童生徒などさまざまな形で「外国につながる児童生徒」たちが点在している。そのような児童生徒たちは、言語や文化が違うということから、他の日本人の児童生徒とのコミュニケーションが上手くいかず、クラスで孤立してしまうことが多いようである。このような児童生徒たちの多くは、学校において数名ずつしかいないため、普段お互いに出会う機会を持つことが少ない。そのため、共に出会い、活動を通して、同じような悩みを抱える人がいることを知り、その悩みを分かち合える友達ができること、また、一人一人の個性を尊重し、自分自身や自分のルーツに自信を持ち、彼ら自身がその国の言語や文化を大切にできる場を提供することを目的として、2006年度より e-project を利用し、活動し続けている。

つながる会の活動は、基本的に3か月に1回のペースで行っている。それぞれの活動で、同じような内容をおこなうのではなく、季節に合わせた活動や、また来たいと思ってもらえるような活動を目標に、毎週1回ミーティングを行っている。また、長期休暇期間の活動では、より多くの子どもが参加できるよう、京都市、宇治市、八幡市などの小中学校にむけ活動のチラシを配布し勧誘をしている。

また、普段の生活では味わえない体験をさせてあげたいという思いで、大学の食堂、体育館などの施設を利用し、活動している。昨年度より、新型コロナウィルスの影響により中断していた大学外での活動も再開している。今年度は京都市青少年科学セン

ターへの遠足を行った。

2. 代表者および構成員

・代表者

秋山大誠 社会領域専攻 3回生

・構成員

松本翔太 人間発達探究プログラム M1

大野遙菜 国語領域専攻 4回生

辻朱花 国語領域専攻 4回生

佐藤翔梧 社会領域専攻 3回生

村古珠乃梨 社会領域専攻 3回生

岩井愛子 社会領域専攻 3回生

是枝己咲子 社会領域専攻 3回生

達脇萌 教育学専攻 3回生

藤峰帆乃香 教育学専攻 3回生

六車楓瑚 発達障害教育専攻 2回生

伊藤千代 国語領域専攻 1回生

河野仁美 国語領域専攻 1回生

下村昊太郎 国語領域専攻 1回生

袖岡奈々 国語領域専攻 1回生

辻井奈々 国語領域専攻 1回生

高峰真優 数学領域専攻 1回生

3. 助言教員

浜田麻里先生 [国文学科]

第2章 内容や実施経過など

1. 勉強会

7月8日(火) 16:00~18:20

講師 花岡正義様、杉本篤子様

(「やさしい日本語」有志の会)

講義テーマ『「やさしい日本語」の基礎』

二人の講師をお招きし、学生対象の勉強会を開催した。事前に構成員以外の学生にも開催を告知し、計15名の学生が参加をした。

2. 8月の活動

5・6・7月 活動内容の考案、準備

チラシの作成、印刷、発送

8月上旬 参加者への電話、

直前ミーティング	9 : 45～	自己紹介・アイスブレイク
8月 6日 活動日	10 : 15～	徒歩で大学から京都市青少年科学センタ ーへ向かう
8 : 45 学生集合、直前準備	11 : 00～	施設見学・体験 (施設を用いたウォークラリー、施設内 で昼食休憩)
10 : 00 お迎え、子ども集合	14 : 50～	写真撮影、大学へ戻る
10 : 00～ 自己紹介・アイスブレイク	16 : 00～	お見送り、子ども解散 →片付け、学生反省会
10 : 30～ 勉強会	18 : 00	学生解散
11 : 15～ 教室にてレクリエーション (ミニゲーム大会)		
12 : 00～ 大学食堂にて昼食		
13 : 00～ 体育館にてレクリエーション (ライン鬼ごっこ、巨大神経衰弱)		
14 : 00～ 工作 (風車作り)		
15 : 00～ かき氷作り		
15 : 30～ アンケート、写真撮影		
16 : 00～ お見送り、子ども解散 →片付け、学生反省会		
18 : 00 学生解散		

3. KBS 京都×京都府人権啓発推進室 ラジオ出演
打ち合わせ 7月 17日 (木) 16 : 30～
出演 8月 27日 (水) 11 : 10～

京都府の人権強調月間である 8 月に伴い、京都府の
人権啓発推進室と KBS 京都による「もっと知りた
い！人権情報」のコーナーにつながる会として出演
させていただいた。トークテーマは「外国にルーツ
をもつ子どもたちとその環境」となっており、これ
までの活動を通して見えてきた外国にルーツをもつ
子どもたちの現状、学校生活や日常生活で直面する
苦労や悩み、それらに対しての支援について情報發
信活動を行った。

4. 10 月の活動について

7月中旬～	活動内容の考案、準備 チラシの作成、印刷、発送
8月 24 日	視察
10月 上旬	参加者への電話連絡
10月 21 日	直前ミーティング
10月 26 日	活動日
8 : 45	学生集合、直前準備
9 : 45	お迎え、子ども集合

5. ヒューマンフェスタ京都 2025 への参加

12月 7日 (日) 京都テルサ

京都テルサにて開催された、ヒューマンフェスタ
京都 2025 に昨年度に引き続き参加させていただい
た。このイベントは、参加者が人権について気づき、
考え、行動につながることを目的として開催される
総合的な参加体験型のイベントであり、今回のテ
マは「いのちの輝き～あなたの思いが、明日をつな
ぐ～」であった。つながる会として、外国にルーツ
をもつ子どもとその環境について来場者に認知して
もらうことを目的としてブースを出した。また、
今年度はステージ発表にも参加をした。さらに、他
の団体のブースや活動を見学し、我々と同様外国に
ルーツをもつ方を対象に活動している団体様や、他
の人権問題に対して取り組んでいる団体様との交流
を行った。

6. 12 月の活動について

10月下旬～	活動内容の考案、準備、 チラシ作成・印刷・発送
12月上旬	参加者への電話連絡
12月 9日	直前ミーティング、リハーサル
12月 14 日	活動日
8 : 45	学生集合、直前準備
10 : 00	お迎え、子ども集合
10 : 00～	自己紹介・アイスブレイク
10 : 30～	調理実習 (カレー作り) (調理終了後、そのまま実食)
13 : 30～	工作 (紙コップ雪だるま作り)

14:30～	教室レクリエーション (フルーツバスケット、 じゃんけん列車)
15:30～	アンケート、写真撮影
16:00～	お見送り、子ども解散 →片付け、学生反省会
18:00	学生解散

第3章 結果や成果など

今年度は、昨年度からの改善も含め、大きく3つの成果をあげられた。

まず1つ目は、外部機関との連携を多く行うことができた点だ。今年度は、昨年度開催できなかつた勉強会を開催することができたほか、京都府人権啓発推進室の活動に多く参加し、ラジオ出演やヒューマンフェスタ2025への参加を行うことができた。これまで大学内で子どもとのかかわりを行うことが主体であったが、今年度はこうしたほかの機関との連携を多く行うことができたことで、「外国にルーツをもつ子どもとその環境」という我々が扱う問題を、多くの人に発信することができたと考える。子どもたちが生活しやすい、我々のような取り組みがなくとも活き活きと過ごせるような社会の実現のため、今後もこうした情報発信の役割も担っていきたいと考える。

2つ目は、活動内容の充実である。昨年度、新入生の参加が少なく、学生不足という問題があったなかで、今年度は勧誘活動を増やしたこと、11名の1回生が活動に参加してくれるようになった。学生の数が増加したことで、各活動における内容を充実させることに繋がったと考える。より多くの視点、考え方から活動内容を考えたり、事前の準備もより入念に行ったりできるようになった。活動日も、子どもたちの様子を多くの学生が見守ることができ、子どもたち同士のつながりを生む役割を学生が果たすことができたと考える。人数の増加が顕著な中で、今後も学生の勧誘を大切にしていきたい。

3つ目は、参加人数の増加である。昨年度は各活動平均12名の参加であったが、今年度は各活動平均32.3名と飛躍的に増加した。昨年度より変わらず

京都市、宇治市、亀岡市、八幡市、向日市、城陽市の小中学校に活動のチラシを配布し、参加募集を呼びかけているが、今年度は別の方法での効果があつたと捉えている。学生が学校ボランティア、支援員として様々な学校へ行っている中で募集を呼びかけたことが一つの要因になった。参加する子どもや、学校の先生、保護者の方の考えとして、誰がどのように運営しているのか不透明な活動に参加させることに、不安を感じることが多いと考えられる。そうした問題に対して、普段から学校にいる学生が運営している活動、という前提があることで、子どもたちが安心して参加することができるだけでなく、学校の先生や保護者の方も安心して参加させることに繋がると考える。今年度の成果は、学校とつながる会の連携が希薄となっていたこれまでの課題を解決するきっかけになるとを考えている。今後もこうした学生が主体となって学校とつながる会の連携を図っていきたい。また、活動内容の工夫も参加人数増加の一つの要因として考えられる。参加した子どもの学校の先生から、普段と違った様子を見ることができた、といった声もいただくことができた。安心して自分をだすことができるような活動を目指し内容を工夫してきたことで、また来たい、と思ってもらえるようになったのではないかと考える。

第4章 まとめと反省、今後の展望など

1. まとめと反省

今年度は上記のように他機関との連携に伴う情報発信活動や、募集人数の増加に伴う新たな学校とのつながりの在り方についても発見することができた。活動においても回を重ねるごとに学生が主体的に動くことができるようになり、子どもたちのために、という共通の目的のもと協力して事前準備や当日に臨むことができたと考える。子どもたちがつながる会に来て安心できる、自分の良さを引き出せるような活動のため、まずは学生が一丸となり活動することの大切さを改めて知ることのできた1年間となったと考える。

一方で今年度の活動を通して課題も残った。人数が増加したことに伴い、安全性の面で再検討が必要

となってくると感じられた。12月の活動では調理室を使用したが、子どもや学生、大人の方を合わせると調理室が狭くなってしまう事態となった。人の増加により危険が増えることも念頭に置き、今後の活動内容を熟考していく必要があると感じた。また、今年度は子どもたちの学習支援に対しての活動が少なかった。各活動のレクの中で、学びながら楽しめる活動を行うことはできてきているものの、学校の勉強に対する支援が8月の活動のみとなってしまった。活動時期や回数を増やし、学習支援にも力を入れていくことが今後の課題と考え、改めて検討していきたい。

2. 今後の展望

今年度の活動を通して、外国にルーツをもつ子どもたちの姿や、彼らがもつ可能性、そしてその可能性を活かしていくために必要な支援について、より深く理解することができたと考える。多くの成果を得ることができた一年であり、この収穫を次年度以降、活動を継続させるだけでなく、より発展させていくことが必要である。一方で、活動を重ねる中で新たな課題も明らかとなった。今後は、これらの成果と課題の双方を踏まえ、活動の質を一層高めていきたい。

まず、次年度に向けた最優先の課題として、安全性の確保を位置付ける。参加人数の増加に対応するため、活動内容や使用施設を改めて見直し、安全で無理のない運営体制の構築を進めていく。また、これまでの活動を通して明らかになった危険要因を整理し、危機対応マニュアル等を作成することで、学生一人ひとりが状況に応じて適切に対応できる体制を整えたい。大学内での活動に限らず、子どもたちが自宅を出てから帰宅するまでを見据え、学生としてできる安全配慮について、改めて検討していきたい。

加えて、学習支援の充実も今後の大きな柱として位置付けたい。そのためには、外国にルーツをもつ子どもたちが学校生活の中でどのようなつまずきを抱えているのかを把握することが不可欠であり、学校との連携をより一層深めていくことが求められる。

今年度築くことができた学校とのつながりを活かし、今後も継続的な連携を大切にしていきたい。

つながる会の最終的な目標は、この活動が無くても子どもたちが学校や社会で活き活きと、自分自身の良さを出していけるような社会の実現であると考える。しかし、我々だけの努力では達成することはできない。学校や社会全体で子どもたちを支援していける環境を創り出すことが必要である。そのためには、今後も外国にルーツをもつ子どもたちやその環境について多くの人に知ってもらえるよう情報発信を続け、学校とも密に連携をとっていきたいと考える。